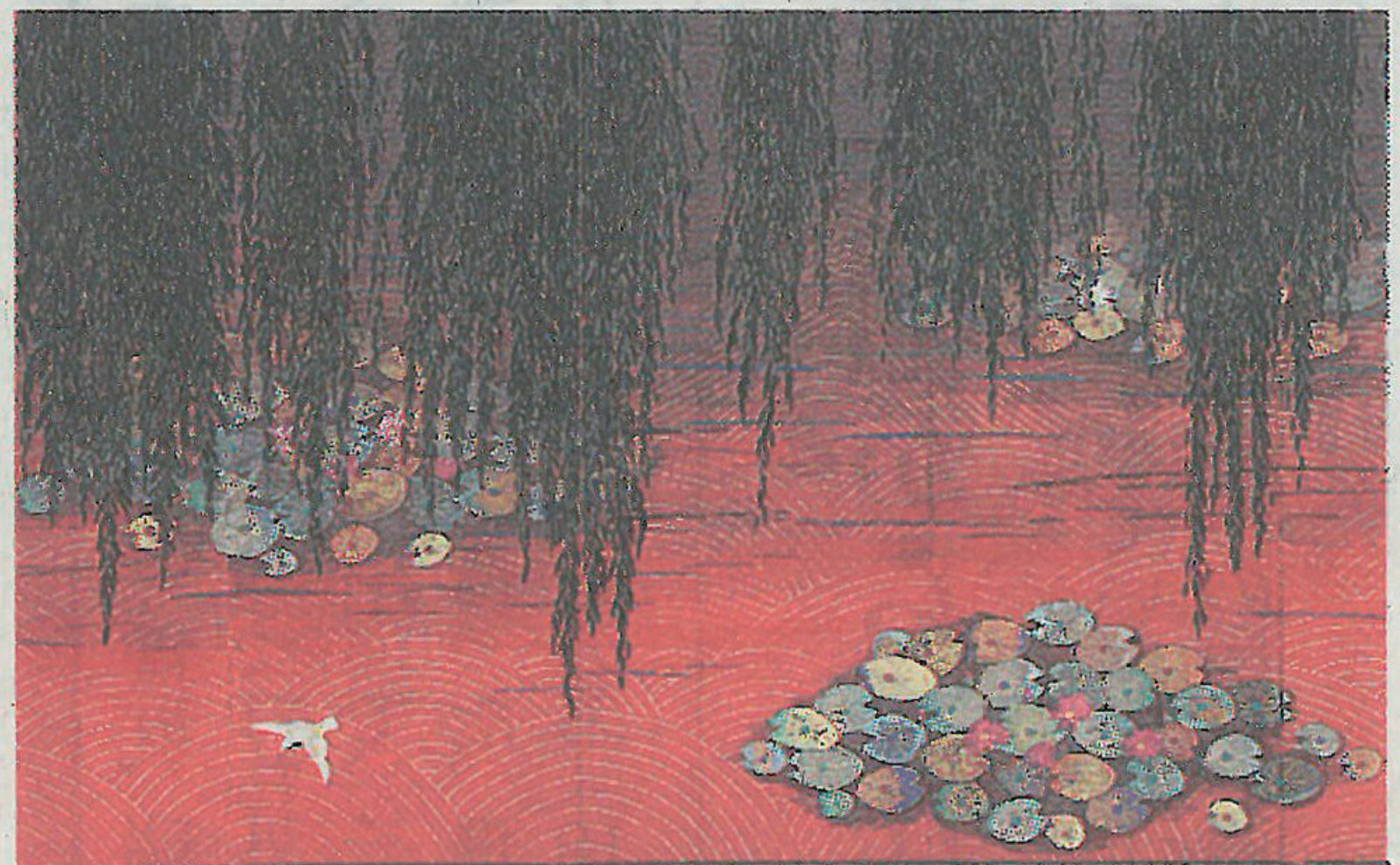


美術の巨匠、モネゆかりの仏の美術館で、モネを敬愛する日本画家・平松礼二の個展が開催中だ。国、時代、画法を超えて響く芸術の魂を東京工芸大学教授の石川健次氏がレポートする。

平松礼二氏のコメント
20年ほど前、オランジュリー美術館でモネの「睡蓮」の連作を見たとき、大変な衝撃を受けた。50歳をすぎ、自分の画業を見直そうと決め、初めてパリに足を運んだときだった。

印象派と日本美術つなぐ

西洋の油彩画で可能だったのか探りたくなった。それから15年ほどかけ、何度もフランスに通ってスケッチを重ねた。今回の展覧会は、そうして手掛けた作品が美術館の目に留まって実現した。予想外の反響に驚いている。新作はモネや印象派を自分なりに探究した成果と、「遊び心」と「アニミズム」という日本美術ならではの特徴を自分の中でつないで描いた。70歳を過ぎ、迷いなく描けるようになった。



展示作品の1つ《夕映えの秋―睡蓮序曲》(部分)

にぎわい、「これを機会にフランスでも日本画の理解が深まると思う」とカンディール館長は期待する。「分かりやすいけど、ミステリアス」。自然のモチーフがふんだんに登場する一方、装飾性や意匠性に富む平松の魅力をそのように話す声を会場で耳にした。モネ研究の第一人者でオルセー美術館学芸長のシルヴィー・パタンさんは、一番のお気に入りという新作の《夕映えの秋―睡蓮序曲》の前で、「平松の絵にはモネのエスプリを感じる。でも追隨などでは決してない。独創だ」と強調した。軸足を揺るがすことなく、悠々と時空を超える普遍性と今日性をともに希求する平松を、まさに言い得た言葉だと思つた。

を下敷きにモネを、印象派を再解釈した。日欧を往還する創造的応答の中で、新古を超えた美の根源を、不易の芸術を平松は求めたのである。

「時空を超えたダイナミズムのなかでモネとの類似や相違が生まれている。現代日本画の魅力と可能性にひかれた」。

時空を超えた独創の美

早々に個展を見た私に、モネの家の近くに建つジヴェルニー印象派美術館のディエゴ・カンディール館長は、企画意図に触れてそう話した。モネの作品が一緒に並んでいるのは、類似や相違をきっかけに平松の深化と変化を見てほしいとの願いだろう。「モネへのオマージュも感じて」と言う本展監修者で武蔵大学教授の小山ブリジットさんの思いでもあるだろう。

「ミステリアス」

開幕直後から大勢の観客で

平松氏(写真中央)とカンディール館長(左)、監修者の小山ブリジット武蔵大学教授(右)(フランス、印象派美術館)



フランスで平松礼二展

フランスの公立美術館で、活躍中の日本画家の個展が開かれるのは稀だ。終了後は新作すべてが美術館に買い上げられ、そのコレクションに加わる。まさに異例尽くし、快挙と言つて過言ではない。

モネの絵を再解釈

パリから西へ車で約1時間、緑豊かなジヴェルニーは印象派を代表するモネが後半生を過ごした地だ。1994年、パリのオランジュリー美術館でモネの大作《睡蓮》に触発された平松は、「印象派・ジャポニスムへの旅」を主題に掲げる。ジヴェルニーに残るモネの家を幾度も訪ね、《睡蓮》が生まれた池のほとりと同じ景色を見ながら創作